笛吹市探訪

『ふるさとの祭り』三
「甲斐いちのみや大文字焼き」

8月16日の夜、一宮町の大久保山に「大」の文字が明々と燃え上がります。「甲斐いちのみや大文字焼き」はお盆の「送り火」として古くから行われてきた行事です。一時途絶えましたが、昭和63年に復活しました。

甲斐いちのみや大文字焼き

お盆は、旧暦の7月15日を中心に先祖の霊をまつる行事で、古くからの先祖供養の儀式と仏教行事の「盂蘭盆」が習合して現在の形になったとされています。

お盆の期間は、地獄の釜の蓋が開く7月1日（旧暦）から、お地蔵さんの縁日である24日までとされています。

13日の迎え盆から16日の送り盆にかけてが、お盆の中心行事です。13日の夕方に焚く「迎え火」を目印にして、祖先の霊たちが家々に戻ってきます。これを迎え、もてなし、そしてあの世へ送り返すことが、お盆の目的なのです。

お盆の三ヵ日（14～16日）に入ると、集落の人々が行列して新盆の家を一軒ずつ訪問し、供養をしていきます。迎えた先祖の霊をあの世へと「送り出す」のが「精霊送り」の行事です。

迎え盆の際には「迎え火」がありましたが、これに対応するのが「送り火」です。最終日16日の晩に村境や河原などこの世とあの世の境界とされる場所で「送り火」を焚き「精霊送り」の儀礼が行われます。「送り火」には、それぞれの家で先祖の霊を送り出すための小さなものから、有名な京都の「五山の送り火」のように共同で行う大規模なものまでありました。一宮で行われていた「大文字焼き」はそうした祖先の霊を送るための「送り火」だったのです。

江戸時代に書かれた『甲斐国志』にはその当時行われていた各地の「送り火」が記載されています。おおよそ次のとおりです。

「中沢（一宮町金沢）の山の中には大積寺というお寺の跡があり、毎年7月16日の夜にお盆の送り火を焚いている。「大」の文字の形に焼くので、その山を「大文字」山と呼んでいる。笈形山（春日居町）では笈（山伏が荷物を入れて背負う箱）の形、柏尾山（甲州市勝沼町）では鳥居の形、奈良原山（八代町）では竿（錫杖）の形でそれぞれに送り火を焚いており、競い合うような有様だった」また別の項目では、藤垈村（境川町）の「這藤」形の送り火について記載されています。

このように、現在では春に行われている笈形焼きも、秋に行われている鳥居焼きも、かつてはお盆の送り火として焚かれていたものでした。

送り火がいつ頃から行われていたのかは不明です。笈形焼きと鳥居焼きについては、平安時代後期、大善寺（勝沼町）と長谷寺（春日居町）の僧徒との間に、修験問答の相違から勢力争いが生じ、長谷寺の僧徒が大善寺から笈を奪って焼き払い、大善寺の僧徒が長谷寺に協力した山梨岡神社の鳥居を奪って焼き払ったことが始まりだという伝説もあります。

これらの送り火は、現在の笛吹市を取り囲むように配置されています。笛吹市域が甲斐国の中心だった頃に、甲斐国全体の霊を供養するために始められたと推測することもできます。

今年3月11日の東日本大震災と大津波で多くの尊い命が失われました。今年の大文字焼きでは命を落とされた方々のご冥福と、いち早い復興を祈りたいと思います。